



# 熟れごろ人妻農園

巨道空二  
挿絵／ロッコ

立ち読み版

序章	夏の空と、ポニーテール……………	4
第一章	雨音を聞きながら……………	14
第二章	人妻の誘惑……………	67
第三章	川辺の秘密の逢瀬……………	116
第四章	庭木の影で……………	168
第五章	夏祭りの夜に……………	217
終章	秋風たちて……………	282



---

## 登場人物 *Characters*

---

### 加島 悠太

(かしま ゆうた)

大学の夏休み中に帰省した青年。アルバイトがわりに実家の農業を手伝わされている。童貞。

### 宗像 早苗

(むなかた さなえ)

夏場は田舎の別荘にて一人で過ごし、年齢の離れた夫と週末のみ夫婦として生活している若妻。加島家の畑の隣にある市民農園で家庭菜園を営んでいる。

---

「ん……私の中で、暴れたがってピクピクしてます……」

熱すぎるほどに熱い結合部に、周囲がかすかに溶けだしたかのようにほぐれてきていた。じんわりと分泌されていた花蜜が密着面にまわり潤滑油の役割を果たしていく。ぬめぬめとした粘膜が蜜をまぶされながらさらに甘美なものとなっていた。

ずちゅつ、にちゃつ、じゅぶつ——。

かすかに上下に動かしながら、早苗が身体を揺らす。それだけで立派なバストが目を楽しませてくれるのだが、それ以上に蜜壺に包まれる感覚が少しずつ、しかし確実に大きくなり、彼女の締めつけをより深く、より強く感じられるようになっていくのは女性経験の乏しい若者には感動だった。肉竿と腰に感じる彼女の重みが嬉しく、自分の身体が愛しい女の身体を支えている感覚は何ものにも替えがたい。

「んふっ……。入りましたよ、これが私の奥です」

とろけるような声。かすかに語尾がのびた甘いささやきが耳をくすぐる。見あげれば、両手で胸を抱くようにした早苗の潤んだ瞳が目に入る。

「うん……すごく、気持ちいいっ。早苗さんの中、すごいよっ」

「も、もう。お口がうまいんだから。私も……気持ち、いいですけど」

ちよつと照れながら、長い髪を手櫛ですき、後ろに流す。そして、ちよつとだけ唇

を突き出して、こう言った。目尻までピンクに染まっているのが艶っぽかった。

「今日は、私が悠太さんを感じさせてあげるのですから。そのまま、ね……」

人妻はゆっくりと腰を前後にグラインドさせながら様子を見ている。前後それぞれのストロークエンドで膣がきゅつと締まるのが気持ちいい。ストロークこそ短いものの、その瞬間の摩擦感が激しい快感だ。

「あんっ……。悠太さんの、ビクビク反応してます」

腰をグラインドさせるたびに大きく揺れる乳房を支えるようにしながら、嬉しそうにささやく。その手のおかげでさらに胸の大きさがさらに強調されていた。

「さ、早苗さんだって、びくびくしてるよ……くうっ」

髪を下ろしたただけでなんだか色っぽく見える。そして、衣服を身につけているときに比べて明らかに大きな乳房。二カップくらいは上に見える。小さく見える下着の効果、ありすぎだと思った。目の前の光景があまりに魅力的すぎて目が離せない。

「だ、だって、気持ちいいからっ。身体が勝手に……あううっ」

クイクイと腰が前後にグラインドするたびにショートストロークの抽送が敏感な龟头粘膜をこすりあげる。小刻みに締めつける膣肉との摩擦感、二人の内圧に押しつけられている粘膜同士に泡立つような快美感を生じさせている。

「あつ、ああつ、と、止まらないんですつ」

女体の奥は複雑な凹凸があつて、早苗が腰をグラインドさせるたびに違う部位がペニスに当たると。彼女の中は無数のリングがあつて、それが別々に締めつけてくるようだ。奥と入り口とで、また中程でも締めつけが違い、そのリズムが腰の動きと完全には同調しないところがまたもどかしく、新たな快感を生んでいた。

「ゆ、悠太さんっ」

彼女の伸ばされた手をとると、両手でもつながった。手持ちぶさただった掌に伝わる充実感に心が熱くなる。男の上で馬乗りになった人妻は手綱を操るように男の手を握ったまま振り回すのが、それはそれで魅力的だった。

「んあつ、あつ、はああつ——」

市民農園の東屋のときのような抑えた声ではなく、伸びやかですらあるなまめかしい声がりびングの空間に吸い込まれていく。羞恥に抑えた声も魅力的だったが、こうして大きく聞こえる嬌声もまた色っぽい。

「きよ、今日は声が出るんですね、早苗さん。可愛いです」

「あつ——！」

その瞬間、きゅつと強い締めつけが男性器を襲った。思わずうめき声がこぼれるほ

どだ。彼女の中全体が収縮し、激しい快美感が脳髓を直撃する。

「も、もうっ。デリカシーが足りませんっ」

「痛っ、いたたたっ」

きゅっと手をつねられてしまった。ふいっと横を向いてしまった人妻が恥ずかしげに身体をよじると、今度は抽送に回転運動が加わる。これはこれでたまらない快感で、手をつねられながらもペニスは大きく膨張してしまった。

膣肉が敏感に反応して締めつけてくると、肉竿はさらに急角度に反り返る。女肉の奥で子宮口に先端が当たる感触が肉棒をとろかしそうだ。

「きやあっ……お、奥がすぐく突きあげてくるの……くふっ、んっ、ああっ」

大きく痙攣したペニスに一瞬だけ驚きの声をあげた人妻は片手で口元を押さえたいが、それで声を抑えられていたのも束の間だった。くぐもった声をかみ殺しながらも、甘いうめきにとろけ、溶けだしていく。

いつの間にか彼女の中はとろけるような蜜液で満たされ、しなやかな身体がうねるごとに渦巻き、からみつき、泡立っている。複雑な肉壁の隅々までも潤しながら、敏感すぎる粘膜の仲立ちとなって肉悦をお互いの身体に伝えていく。

「んんふっ、んっ、ああっ——あんんっ」

じきにこらえきれない甘いうめきがこぼれ、それはすぐに高く、低く渦巻く嬌声となつていく。すでに高まつた快感は抑えきれられるものではなくて、早苗は髪を振り乱し、白い肌を揺らしながら恥ずかしくも艶っぽい喘ぎを漏らし続けるのだった。

じゅぷつ、ずぼつ、ぬゆるる——っ！

「ああつ、深いっ。深いの……んんっ、あつああつ」

湿った水音はくぐもつた発泡音に変わり、お互いの下腹部が、太腿が打ち合い、こすれあう淫らな音とともに耳にからみつく。すでに青年の官能も絶頂近くにあつて、このまま淫らな合奏を聞き続けるだけで達してしまいそうだった。

「あつ……悠太さん？」

つないだ手を引かれた人妻が青年の上に倒れ込むかたちになった。二人の間で半球状の胸の膨らみがクツションのように形をゆがめ、青年の胸板に密着する。

「はあ、はあつ……今日は私がしてさしあげる……はずだったのに……」

汗ばんだ肌がふれあうだけでも感じてしまうのか、早苗の言葉は途切れがちだった。「さ、早苗さん。ぼくも触りたいです。もつともつと、触りたいです……」

ぎゅつと彼女を抱きしめると彼女の柔らかさを腕いっぱい感じられる。優しい甘い香りが胸いっぱいになり、彼女がより密着して感じられた。



その間にも彼女の身体の中はひくひくと蠕動し、まるで別の生き物のように動いて若いペニスをくいと締めてくる。

「悠太さんったら……。あ、あんっ。いいですよ。私の身体、いっぱい触って……」  
頬にキスされるだけで股間に血流が集中する。自分の全神経がこの女性に集中しているのだと思った。身体を起こした早苗に向かい合うように、つながったまま悠太も身体を起こす。騎乗位から対面座位への移行はあっけないほど簡単だった。身体を起こして彼女の身体を引き寄せれば新たな肉悦の旅が始まる。

たぶん——。

ちやうど悠太の顔の真正面に豊穡の象徴たる両の乳房が揺れている。深い胸の谷間に顔を埋めると、柔らかくも温かい乳肉が迎えてくれる。まるで胸の膨らみに包まれているかのような幸福感を感じながら柔肉に吸いついた。

「あふうっ……。もう、赤ちゃんみたいに……。んくっ、んっんんっ」

弾力に満ちた滑らかな肌を唇と舌で味わいながら、もう一方の乳房を掌で味わう。指を食いこませるようにしてもみしだくとFカップはあろうかという充実した乳房の内圧が押し返してくる。

「本当に、大きいんですね。早苗さんのおっぱい、素敵ですっ」

「いやあ……は、恥ずかしいから……ああつ、そんなに吸ってはあつ」

圧倒的な量感を唇と頬で楽しみながら、その頂点に位置する小さな突起を口に含む。乳首のぷつくりとした感触を舌で転がすと、見る見るうちに大きくなる。敏感さを嬉しく思いながら吸いあげると人妻の惱ましい声が耳を楽しませてくれる。最高だった。たぷつ、たぷん——。

指を食いこませれば食いこませるほどに、掌全体でもみこめばもみこむほどに柔軟な乳肉は深く受け入れ、手に余るボリユームと弾力で返してくれる。男なら誰でも夢中になってしまいそうな甘美な体験だ。

「ああつ、こんなにされたら、もつと大きくなっちゃうかもつ」  
「大きくなつていいですよ。ぼく、大きいおっぱい好きですつ」

そうささやきながら、硬く突起した乳首を思いきり吸いあげると人妻の身体が大きく震えた。乳首も、乳房全体もかなり敏感なようだ。

「ひゃうつ、あんつ、ああつ」

きゅつと彼女が締めつけてくるのが愛おしい。乳首と膣肉が直結しているみたいに敏感に反応してくれる膣内はとろとろに溶け崩れ、柔らかいくせに締めつけは弛緩との差がさらに大きくなっている。

「はうんっ、ああっ……あんっ、あっ……」

ひとしきり乳首を舐めしゃぶると、今度は反対の乳首をいきなり強く吸ってみる。突然の刺激に大きく喘いだ早苗が青年の頭を抱き抱えるようにして強く抱きしめられる。彼女の思いが表れているような気がして、さらに心は猛っていく。

「こ、こんなにされたら我慢できなくなっちゃうっ」

そう言ったときには彼女の腰は再び激しく動き始めている。たっぷりと潤った秘処からはすでにとろけた蜜があふれ、悠太の腰をも濡らしていた。ぐいぐいと彼女の下腹部が押しつけられると、恥骨が当たる感触すらもわかるほどだ。

「くふうっ、んっ、あああっ、はあっ、あああっ」

赤い唇が半開きになっている様子が淫靡だった。髪を振り乱し、激しく身体を揺すり、腰を振りたてる激しさは、普段の早苗の上品さからは考えられないほどだ。腰のグラインドのひとつごとに乳房がたぶたと揺れ、重みのある乳肉が頬に当たり、乳首が口の中で暴れるのだった。

「悠太さんっ、わ、私……このままじゃっ……」

青年にしがみつきながらも、人妻の恥骨がぐいぐいと男に押しつけられ、いきりたつた肉竿がちやにちやと淫蜜をかき回す。

「わ、私一人だけ、恥をつ、かいちゃいそうなのおつ……あんっ、はあっ、あああっ」  
「ぼ、ぼくも……ううっ、我慢できそうに、ないですっ、くっ、うああっ」

激しい興奮と快楽に二人の声も途切れ途切れだ。荒い呼吸に、長い言葉を口に出せないほどに身体は熱く燃えあがり、脳髄は肉悦にとろけそうになっている。

「はあっ、あっ、ああんっ、は、激しいのっ」

彼女の動きにあわせて腰を突きあげると、より深く、より奥にまで届いたペニスが鋭い快楽信号を発した。柔らかすぎる乳肉に顔をうずめながら、弾力ある乳首を、可愛らしい乳輪をほおばりながら彼女を抱きしめ、彼女の動きを腕でサポートする。

ズプッ、ジュプジュプッ、ズポオッ——！

早苗の快感の高まりとともに、腰の前後グラインドに加えて上下のストロークが加わった。激しいピストン運動にペニスが抜けてしまうのではないかと思うほどだ。大量の淫蜜に潤滑された肉洞は時に柔らかく、時にきつくペニスを締めつけ、幾層にも重なった肉襞による摩擦感に龟头粘膜が、肉竿が溶けてしまいそうだ。

「くううっ、ぼ、ぼくもそろそろっ、我慢、きついよっ」

ペニスはすでに限界だ。じんじんと波となって襲ってくる射精感覚は下半身を満たし、すべてをぶちまけたい欲望が破裂しそうなほどに充満し、渦巻いていた。

「き、来てえつ。来てくださいいっ。私も、はうっ、んくうっ、く——っ」

汗ばんだ肌がうつつすらとピンクに染まり、乱れた髪が揺れるさまが凄艶だ。張りつめた、充実しきつた女体が若い男の上でうねり、躍る。

はあっ、はあっ、はあっ——。

二人の動きは示し合わせるでもなく、ぴったりと一致している。肉と肉が、肌と肌  
が、粘膜と粘膜がうごめき、ふれあい、ぶつかりあう。汗を、粘液を潤滑油として快  
楽をむさぼりながら、さらに高みを目指して、ふたつの肉体がからまり、震えていた。  
ドクン、ドクン、ドクッ、ドクッ、ドクッ——。

二人の心臓の拍動までも一致している気がした。全身を巡る血流の音が轟音となつ  
て聞こえるような錯覚を感じるくらいだ。激しい興奮に女の白い肌しか目に入らず、  
彼女の艶やかな嬌声しか聞こえない。激しいく締めを見せる膣肉に包まれながら、  
果汁のたっぷりつまつた果実をむさぼり、わななく女体を貫き続ける。

「ひゃうっ、ふっ、ふううっ、んっ、あっ、あああ——っ」

ただひたすらに彼女を抱きしめ、突きあげ、肉壺の奥の奥までもかき回し、えぐり  
ぬく。欲望の沸騰した意識にはそれしかなくなっていて、すぐそこまで来ている限界  
すらも意識しないほどだった。

「あ、はああつ、い、イクつ、私もうつ、ああつ、あつあああああ——っ」

ビクビクと小刻みな収縮とともに、悲鳴にも似た声及早苗の唇からこぼれ、リビングの空間に広がっていく。激しい快感にこわばり、震える彼女の中は熱く、ぬめやかな粘膜が亀頭粘膜を思いきり刺激していて、ついに悠太の欲望もあふれ出し、爆発的な肉悦の高まりが身体を中心に貫き、脳天まで駆け抜ける。

ビクビクッ、ドクドクドクッ——！

オーガズムの深い喜悦に収縮を繰り返す牝肉の粘膜とこすれあつた牡の肉塊が大きく震え、全身がこわばるほどの快感とともに熱いマグマを噴きあげる。睾丸から輸精管を貫きながら高い内圧に押し出され、快感の微粒子を振りまきながらペニスを内側から押し広げ、鈴口から断続的な噴火となって女肉の奥に打ち込まれていく。

ドピユッ、ドピユルルッ！ ビユルルル——ッ！

豊かな胸の隆起に左右から挟まれるようにして顔を埋めながら、悠太は全身で快感を味わっていた。年上の女性を抱きしめる腕は柔らかく、触れているだけでも気持ちいい肌を、顔は滑らかで柔らかく、果汁たっぷりの熟しきった果実を、太腿はすべやかでしなやかな人妻の内腿を感じていた。

「ふあつ、で、出てるっ……悠太さんのが、いっぱい、いっぱいっ」



「あつ、ああ……」

こぼれる声。力の入らなくなった手の間から恥ずかしいほどに色気のこもった喘ぎが漏れ、男の耳を楽しませていた。

はあつ、はあつ、はあ、はあ——。

荒い女の呼吸が少しずつ平常へと戻っていくうちに、一度は完全に遮断されていた谷川のせせらぎがまた耳に戻ってきていた。

「悠太さん、悪い人です。私ばかり感じさせて……」

ぐったりと岩肌に身体を預けながら人妻がつぶやいた。

「それじゃあ、ぼくのも可愛がってくれる？ できれば、その胸で」

そうささやきながら、まだ敏感な乳首を軽く吸いあげると、女の身体に甘い震えが走った。とろんとした目は潤み、凄艶という言葉がぴったりだと思ふ。

「ああ……こんなところで……させるのね……しかも、おっぱいでなんて……」

ぼおとした表情の早苗は頬を真っ赤に上気させたまま、うわごとのようにつぶやく。水面をわたる涼風に頬をなぶらせながら、ほつれた毛が色っぽかった。大岩の段差に半ばよりかかるようにして腰掛ける青年の足下にひざまずいた人妻が潤んだ瞳で



見あげると、男の心臓がどくん、と大きく打った。

男のトランクスタイプの水着に優美な指をかけると、丁寧な手つきでずり下ろしていく。すでに硬く、大きく立ちあがっていたペニスがゴムにひっかかるのを、そっと指をかけて外してくれるのだが、その弾みに大きく反り返ってしまった。

「すごい……もう大きくて……硬いのね……んんっ」

すでに勃起の限度に達しようかという激しい興奮に、ペニスは熱く敏感になっている。女の手で触れられただけで鋭い快感が下半身を駆け抜け、ペニスはビクビクと震えながら先走りの粘液を先端からにじませる。

「こんなによだれを垂らして……暴れん坊さんです……ちゅっ」  
「くうっ」

両手でペニスを握りしめた人妻が先端の張りつめた粘膜にキスをすると、思わず声が出てしまった。見下ろせばポニーテールが白い肌の流れ、胸元に深い谷間を形作るふたつの乳房が揺れている。極楽だと思った。屋外の、いつ誰が通りかかるかもわからない谷川のほとりで、秘密のいたずらが続いている。

「こんな明るいところで大きくして、悠太さん、すぐくエッチなんだから……」

「早苗があんまり可愛いんだもの。我慢できないよ」

その言葉は心からの真実だった。年上の女性が、人の妻が可愛くてしかたがない。彼女のしぐさひとつひとつが、言葉の端々までもが魅力的で、青年の欲望をかきたてる。今だって、下から見あげる早苗の潤んだ瞳にノックアウトされそうなくらいなのに、水着のホックが外され、乳房が完全に露わになると呼吸が荒くなってしまった。

「この水着、便利だね。前を外すだけで脱げるんだ」

「べ、別にエッチのためじゃないんですからねっ」

もう、という言葉を飲み込んだまま、人妻が唇を男の器官に近づけていく。ふっくらとした唇がかすかに開いたかと思うとピンピンに張りつめた亀頭粘膜と接触し、わずかだった接触点が広がり、背筋にこみあげる快感とともにペニスが彼女の口腔へと吸い込まれていく。

「くうっ」

唇が、舌がペニスと接触するだけで快感感があふれてくる。ねっとりとからみついでくる舌のザラつきが、ぬめぬめとした口腔粘膜が、そしてとろけそうに柔らかい唇が。女の秘洞にも似た快感を発生させ、男根はビクビクと震えながらさらに膨張率を増して硬度をあげていた。

「んんっ、ちゅばあっ、んんふっ……。こ、これくらい湿らせればいいのかしら」

人妻の鼻にかかった喘ぎ声が耳をくすぐる。この声だけでも肩から背中がゾクゾクしてしまふほどにセクシード。岩肌についていた手を彼女の髪にうずめると、サラサラした髪感触が心地よく迎えてくれた。

「こ、どうかしら……ううつ。恥ずかしい……悠太さんの、こんなに熱いし」

双丘の間の深い谷間に到達した肉棒が、柔らかな柔肉の間に沈んでいく。たっぷりと唾液をまぶされ潤滑されている摩擦感が亀頭粘膜を張りつめさせ、乳房の内圧が圧迫してくる感覚は想像以上の締めつけとなって男の欲望に火をつける。

「そ、そんな感じで挟んで、しごいてほしいんだ。すごくいいよ」

「ううつ。おっぱいでするなんて、すごくいやらしい感じですよ」

木漏れ日の中で白い肌が羞恥に染まっているのが淫らで、ぎこちない手で乳房を支えながらしてくれている様子がたまらない。彼女の呼吸で、わずかなしぐさで揺れる乳房がそのまま刺激となつて、快感の波状攻撃がペニスを襲う。

「ううつ。こ、このままでもかなり快感があるんだけどね」

「な、なんだか変な感じですよ。おっぱい熱くなっちゃ……」

お互い初めてのパイズリ体験だが、ぎこちない動きは快感の中で次第に滑らかなものになつていた。彼女が前後に身体を揺らすと疑似ピストン運動になる。膣内のよう

な締めつけ感ではない、マイルドな圧迫感と摩擦感が実に気持ちいい。

「悠太さん、気持ちいいですか？　すぐくニユルニユルしてきました」

乳房に包まれる初めての快感にヒクヒクとうごめくペニスからはトロトロとした粘液が分泌され、粘度の高い潤滑液になる。彼女の動きが単純な前後運動にはならないせいか、普段の膣内での抽送とはまた違った、うねりを感じさせる快感がペニスから下半身全体に広がっていく。

「す、すごいな。早苗のおっぱい、やみつきになっちゃいそうだよ」

あまりの快感に腰を浮かせてしまうと、乳房の間から亀頭が飛び出してしまい、その瞬間の締めつけ感の変化がまた気持ちいい。

「あううっ。胸はエッチの道具じゃありません……んんっ、あっ、あんっ」

指でつついてやると、それだけで朱唇から甘いうめきがこぼれる。自分だけでなく、彼女も感じていると思うと、なおさら肉悦が増し、身体が熱くなっていく。

「早苗だつて感じてるじゃないか。乳首なんかもうピンピンだよ」

「ひやううっ、い、いじっちゃだめえっ……ひんっ」

思わず身体をよじる美女なのだが、その動きがまた谷間と肉棒との間に摩擦感を生み、快感を増幅してしまう。肉竿にひねりが加わり、思わずうめいてしまった。

「ううっ。こ、これならどうですか。悠太さん、好きでしよう」

左右の手で乳房を支える力を調節させて上下運動を加えると、また違った感覚がわきおこる。通常のペニスに対しての縦方向の動きではなく、横方向の動きが新鮮な快感だ。しかも、乳房の揺れが左右で微妙に違うのか、それぞれ快感のタイミングが違うのがたまらない。

「う、うん。これ、いいよ。おっぱいが揺れるのがすごく伝わってくるっ」

女性にしてもらう初めてのパイズリはそれだけでも感動ものだが、それが見事な半球状の美しい乳房に挟まれているのは見た目にも豪華で頭がくらくらしそうだ。

膣内とは違って上下左右のうねりが柔肉から伝わってくる感覚に脳髄が熱せられ、快感と熱が渦を巻いていた。ペニスから染み出た快感が下半身にじわじわとたまり、水位をあげている。

「お、おちんちん、ピクピクしてますっ。ああんっ、おっぱいが熱いのおっ」

量感あふれる膨らみが揺れるだけで、その慣性までもが快感につながり、固有振動が肉悦を増幅している気がするほどに悦楽は急激に膨張していく。

身体を前後に揺らしての疑似ピストン運動に腰の上下によるうねりが亀頭粘膜の摩擦に変化をつけ、滑らかすぎる乳房の肌と粘液のぬめりがすばらしく滑らかで、快美

感が脳髓に満ち、背骨のつけ根のあたりで射精感覚がうごめく。

「ううっ。こ、これよすぎて我慢できないっ」

腰の奥に感じる射精感はいわじわと圧力を増していくようで、内圧が高まりガチガチに硬くなり、熱くなったペニスはさらに敏感になり、悦楽をせき止める理性のダムは膨大な圧力にきしみを生じさせている。

「くううっ。もう、もう出るよっ」

「あんっ。そ、それじゃあ、これは……どうかしら……んんふっ」

想像もしていなかった快感がペニス全体を襲っていた。急角度でそそり立つペニスが乳房の間から顔を出しているのに、人妻がむしやぶりついたのだ。

ちゅぱあっ。ちゅっ、ちゅぷっ——。

完全な不意打ちだった。双乳の圧力と肌の滑らかさのマイルドな快感と振動、揺動の快感信号に、いきなりフェラチオの先鋭な快感が加わったのだ。舌と、唇と、そして乳房からの三つの快感がいきなりひとつになり、激しい快感に敏感さを増しているペニスを集中攻撃してくる。

「うっ、うわあっ……くっ、くううっ。これ、すごすぎる……うあっっ！」

ふかふかしているながら素晴らしく滑らかな乳房に挟まれ、疑似ピストン運動で竿を



しごかれる快感と、彼女の唇と口腔粘膜、それに舌のザラザラした感触が複雑にからみあい、重なりあつてギチギチに硬直した男根の快美感をさらに高めていた。

「んふうっ、くちゅっ、ちゅぱあつ……ら、らひていいれふ……っ」

ピンピンに張りつめた亀頭粘膜をゾロリと舐めあげる舌の感触とカリを包み込み、強烈な摩擦感と圧迫感を与える唇の感覚に、男の性感は瞬間的に沸騰していた。初めてのパイズリフェラは快楽中枢を貫く射精感となつて突き抜けていく。

ビクンッ、ビクッ、ドピユッ、ビユクッ、ドピユルッ、ビクビク——ッ！

乳房に挟まれる包まれ感とフェラチオの複合感覚が快感の火柱となり、理性のダムを崩壊させる。肉欲と性感の膨大な圧力がペニスに集中し、激しい射精オーガズムとなつて人妻の口腔粘膜へと欲望の液体を叩きつけた。

「んんっ、んくっ、んんっ——っ」

耳まで真っ赤にした早苗が苦悶にも似た表情のまま必死で大量のスペルマを飲み下していく。量感ある乳房を両手で揺らしながら、どこかせつなげに身体をよじっている。

はあっ、はあっ、はあ——。

夏の空を視界の隅に意識しながら、緑と青で彫作られた沢の風景の中心に彼女を見



る。コクコクと喉を鳴らしながら、白濁液を飲み下していく。

あふれんばかりに豊かな乳房の間から顔を覗かせるペニスに吸いつく早苗の姿はあまりに淫らで、いやらしかった。うっとりとしたところを見あげる人妻の口元から垂れた粘液が胸の谷間に落ち、濡らしているのが欲望をさらに刺激した。

「すごい……悠太さんの、全然小さくならないです……」

愛しい女の賛嘆の声に、男の自尊心がくすぐられた。実際には彼女があまりに魅力的なだけだと思うのだが、それでも恋人の賛辞は嬉しかった。

「早苗が魅力的だから、いくらでもできそうな気がする」

「もう。悠太さんのエッチ」

肉竿を撫でさすり、舌で亀頭を清めながら人妻が笑う。どちらがいやらしいのかわからないが、股間のモノがまったく衰えを見せないのは事実だった。早苗は下半身はかろうじて隠しているものの、上の水着は肩を外れて二の腕にひっかかっている状態で、まろやかな曲線もぼつちりと突起した乳首も丸見えだ。

「ここに手をついてくれるかな」

「ここ……するんですね……本当に……」

木漏れ日を浴びながら白い肌がうねった。圧倒的なポリウレームの乳房がぶると揺

れる。巨岩に手をついてお尻を向けた人妻は恥ずかしそうにうつむいてしまった。

「こんなに色っぽい姿を見せられたら、我慢できないよ」

背中とうなじに水着の紐がかかっているが、パレオの下はもうむき出しのお尻があるだけだ。そう思うと、硬度が落ちないペニスがぐいぐいとさらに角度を増していく。背中から彼女に覆いかぶさるようにして、耳元に口を近づけた。

「早苗はいつでも、どこでもすごく可愛いよ」

「う、うれしいけど、こんなところで……すごく恥ずかしいです……」

羞恥に耳たぶまで染まっているのが桜貝のようで、思わず口をつけてしまった。唇で挟むようにしながら舌で滑らかで柔軟な感触を味わう。

「あんんっ、そ、そんなにされたら、おかしくなっちゃう……」

「おかしくなっちゃっていいよ。もっと、もっと可愛くなつて」

そう言いながら、彼女のお尻に残されたパレオの下に指をくぐらせていく。そこはすでに洪水状態で、あふれた蜜が内腿を濡らしていた。

「ほら、こんなになつてる」

「い、いじめちゃだめですうっ……んんっ」

そのまま秘裂に指を潜らせると、ヒクヒクとうごめく粘膜が温かい。内部はしつと

りとした蜜に満たされていて、指を動かすとクチュクチュとかすかな音がした。さわやかな谷川の風に全身の肌をなぶられながら、人妻は深く感じているのが明らかだった。

「ぼ、ぼくも我慢できないよ。いくよっ」

挿入した指をガイドにしながら、入れ替わりにガチガチに勃起している肉槍を突きこんでいく。それだけで衰れな生け贄は息も絶え絶えな風情で身悶える。

「あううっ、あ、熱いの……熱いのが入ってますっ」

ズブズブッ、ジュブッ、ぬちゅぬちゅっ——！

大量の蜜にまみれたペニスが、空気を巻き込んでかすかな、しかし淫らな音を立てる。白昼の屋外で年下の男のペニスを飲み込んだ人妻の背中が反り返り、震える吐息が手の甲で押し殺されていた。

「くううっ……す、すごいな……こんなに締めちゃ、持たないよっ」

「ううっ、んっ、お外だからかな……な、なんだか感じすぎちゃうのっ」

真夏の、谷川のせせらぎでの初めての露出に人妻の官能が高ぶる。じっとしていてさえヒクヒクとうごめく媚粘膜がからみついてくるというのに、肉槍を突きこめば突きこむほどに激しく、まるで別の生き物であるかのようにうごめいた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

リアルドリーム文庫94  
**熟れごろ人妻農園**  
【電子書籍版】

---

著 者  
**巨道空二**

装 丁  
マイクロハウス

発 行  
**株式会社キルタイムコミュニケーション**  
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F  
●編集部 TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146  
●販売部 TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。  
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。  
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Kuji Kodou 2012-2013  
当ファイルは、リアルドリーム文庫【熟れごろ人妻農園】  
(2012年9月30日 初版発行)に基づいて作成しております。

**<http://ktcom.jp/>**